

## マヤ先生のこと

シンディ・コミュニティの選択

綱島(三宅) 郁子

お世話になったマラヤ大学の指導教官について、少し書いてみたい。

人生は出会いと選択の連続である、という。マラヤ大学言語センター(現:言語学部)の場合、院生は自分で指導教官を選ぶことはできない。少なくとも私の時はそうだった。すべて大学評議会が決定し、指名する。最初の指導教官は、Dato Dr. Asmah Haji Omar 名誉教授の後任として、昨年まで学部長を務めていた広東系の Dr. Choi Kim Yok 教授(当時は講師)だったが、その頃からマヤ先生のお名前は知っていた。ひょんなことから教員会議記録を目にしたことがあり、たった一人、先生だけが律儀に欠席理由を提出されていたのが印象に残っていたからである。

少々横道にそれるが、ここで Dr. Choi(と私達は呼んでいた)についても書き添えておく。

この先生は、とても有能かつ極めて現実主義的な方のような。対照言語学がご専門で、ソルボンヌ大学に提出した博士論文は、マレー語とフランス語の比較およびマレー人がフランス語を学習する際の誤用分析がテーマだった。「だからあなたも」と、マラヤ大学の日本留学コースでマレー人に日本語を教えていた三年間の経験をもとに、マレー語と日本語を比較し、マレー人の日本語を誤用分析するよう強く勧められた。ところがこちらは、図書館で Dr. Choi の論文を読み、中身

取り替えで箱は同じというマラヤ大学にありがたい形式踏襲をさせられるのか、と思った途端にやる気が失せてしまった。Dr. Choi の場合、マレー人のフランス語習得について、同国人の華人がフランスの大学で書いたフランス語の論文だから意義がある。私とは背景そのものが違う。第一、それなら何も、マレーシアくんだりまで来る必要はない。マレー人学生が使う日本語の傾向は、経験からおおよそ見当がつき、授業記録もすべて残してあるが、その分野はむしろ、マレー人の日本語教師が日本に来てなすべき課題ではないだろうか。私にとってはあまり発展性があるとも思えない。無理やり学位論文に仕立て上げなくても、レポートで充分なのだ。

「私の言うとおりにしたら、一年半で博士号が取得できる。私はフランスで一年足らずだったのよ。奨学金が余ったから、残りの滞在期間でもう一つ資格をとったくらいよ」「やればできるのに、何をグズグズしているの? 同じ Ph.D なら、簡単なテーマでやった方が得じゃない。あなたは人生を無駄にしている。一体、学位が欲しいのか要らないのか、どっちなの?」と性急な Dr. Choi。私はゆっくり答えた。「先生がおっしゃることは、ごもっともです。でも私は、マレーシアを少しでもよりよく理解したくて再びここに来ました。お金も時間も浪費したとは思っていません。マレーシア

を知ることは時間がかかります、少なくとも私には」。そこで Dr. Choi は黙ってしまった。そして一言、「したいことではなく、できることをしなさい。人生は短い」<sup>1</sup>。

これまでもよく、教師向きだと言われ、仕事をいただいていた。基本的には教師業を続けるつもりだった。しかし、今ほどマレーシア事情が浸透していなかった当時のことである。政府間協定といえども、日本側の主導で日本語を教え、体制不備のままマレー人学生を日本の大学に受け入れるやり方は疑問だ、と若気の至りから私は一途に思い込んだ<sup>2</sup>。それと同時に、状況が許す限り、職業とは別に、継続性と広がりを含むような自分なりの勉強テーマを持っていたいと望んでい

---

<sup>1</sup> 誤解なきよう二点付け加える。専攻にもよるのだろうが、マレーシアの学生は、しばらく年数を置き、論文草稿がほぼ完成した段階で大学院に登録するのが通例と聞いている。結局は、価値観の問題である。マレーシアの先生方も必死なのだろう。フランス留学中に知り合ったご主人がイラン人なので、法的には Dr. Choi もムスリマのはずだが、そのことを同僚にも黙っていると、これまた日本留学中に会ったイラン人男性と結婚されたマレー人の先生から、かなり前に聞いたことがある。

<sup>2</sup> マレー人元留学生の中には、日本にいる間は従順におとなしく助けを求める態度であっても、マレーシアに戻ると、フラストレーションを逆手にとって、マレー語や英語で日本人を軽蔑するような発言(甘えの構造だの、日本人は自分がトップに立つことしか考えていないだの、英語が下手くそだの、国際化していないだの、奨学金が出たから日本に行っただけだ、等々)をする人がいるのにしばしば出くわし、強い危惧の念を抱いたものである。一方私の方は、マレーシア派遣のお世話を受けた母校の教官から「お気楽なマレーシアのことなんか忘れて、一刻も早く日本社会に復帰せよ」と「説教」されて愕然とした。

た。国際交流基金派遣のマレーシア任期があと半年で終了という頃、後にアメリカに移住された Dr. Rohani Ibrahim という先生に、関心を持っていたテーマの話をする、「じゃ、マラヤ大学の博士コースに登録しなさいよ」と、こともなげにおっしゃった。「ええ！でも私、もっと基礎から勉強しないと」「日本で修士が終わっているなら、マレーシアでも繰り返す必要はない。とにかくやってみなさい」。

話が長くなったが、すべてはここから始まっている。

というわけで、ありがたい助言に感謝しつつも、結局、Dr. Choi の指導生から外していただいた。それがきっかけで、マヤ先生こと Dr. Maya Khemlani David が紹介されたのである。

開口一番、先生はピシパシおっしゃった。「ここでの訓練は、耳を傾けるべき相手とそうでない相手を見分けること。いいわね？」「人がどう言おうと関係ない。あなたはあなた。あなた自身のオリジナルなデータを出しなさい」「理屈じゃない。事実言語せなさい」。これなら私に合いそうだと直感した。

北インド系の人らしく、ユーモラスで大げさな表現を好むのには時々びっくりさせられたが、大変勤勉で仕事が早く、励ましと親しみのこもった連絡を頻繁かつ即座にくださるのはとても刺激的だった。論文数も多く、ホームページはこまめに更新されていた。授業をした後、夜遅くまで一人「残業」されることも珍しくなかったようである。研究室は、所狭しと本がうずたかく山積みで、いつ

も座る場所にちょっと困ったが、私はそういう部屋をおもしろく眺めていた。

多彩なご経歴も興味深い。マラヤ大学経済学部在学中、ニュー・ストレート・タイムズ社のレポーターをし、卒業後は二つの学院で経済学などを教え、ロンドン株式取引所でも働いていらしたようである。シンガポールやオーストラリアで言語関係や図書館学の資格、そしてマラヤ大学とエセックス大学の修士号も二つお持ちである。マラヤ大学で語学講師をする合間に、せっせとリサーチ・データを集め、着々と原稿を書きため、言語学の博士号は50歳前に授与されている。とはいえ、実質的な論文指導は、イギリスの大学で受けたらしい形跡が見られる。社会言語学では世界的に有名な複数の論文編集や、イギリスにある言語研究所のフェローを歴任し、国内外の外交官に対して異文化間コミュニケーションの講義をされるなど、教授の現在もますますご活躍である。

なぜ経済学から言語学に転向されたのかについては、笑って直接答えてくださらなかった。私が見るところ、どちらも環境と資質がなせる自然な選択のように思われる。自分は英語で教育を受けた側であっても、マレー語が主流になりそうだと見て取るやいなや、さっと旅行者用あるいは子ども向けにマレー語で本を出版されるなど、なかなかの戦略家でもある。「その頃は、マレー人じゃない人達にマレー語を教えていたのよ」。ところが、「経済事情があまりよくなく、実入りも少なかった」ので、まもなく方向転換し「今は、マレー人

に英語を教えているの」。ことばの才があればやはり得をする、といっても、ことはそれほど単純でもなさそうである。というのは、結局のところ、他者の言語を身につけて、教える仕事で稼ぐわけで、自らの誇りとするシンディ語を、文化紹介を兼ねて優雅に教えているのではないからである。その点、国力をバックに私がしていた仕事とは、決定的に異なる意味合いを持つ。一言も口にされなかったけれども、先生にしてみれば、(あなたの方こそ結構なご身分ですよ)ということかもしれない。

数年前の自己紹介ホームページには、使用可能な言語として「シンディ語、英語、マレー語」に加えて「ヒンディ語、ウルドゥ語」も並べられていた。シンディ語は、ペルシャ語やアラビア語からの借用語を多く含み、アラビア文字を使用すると聞く。マヤ先生も「ジャウィのような文字」を少し学んだそうだ。元はほぼ同一の言葉であったとされるヒンディ語とウルドゥ語も、前者がデーヴァナーガリー文字とサンスクリット系語彙を使う一方で、後者はペルシャ文字書体とアラビア系語彙を取り入れ、分かれていったという。「じゃあ、やっぱりパキスタンやインドに郷愁をお持ちなんでしょう」とお尋ねしたところ、「パキスタンにノスタルジーはないわ。もう帰る場所がないし」と淋しそうだった。「以前、教えてくれる先生がここの大学にいたから、ちょっとコースを取っただけなのよ」とのことだった。昔は全くナイーブにも、インド系ポリグロットの器用さに素直に圧倒されていたが、少し話してみると、案外、実情が垣間見えてくるところ

もある。マレー語を教えることにさほど抵抗がなかったらしいのも、このような文化的背景を知れば合点がいく<sup>3</sup>。

マヤ先生は、マレーシアのシンディ・コミュニティ<sup>4</sup>の二世に相当する。マレーシア着任後半年ほどして、首都の旧目抜き通りにあるグローブシルク・ストアがシンド系の経営だと聞き、コミュニティの存在を知った<sup>5</sup>。もともと織物や布地などの商売で有名である。

---

<sup>3</sup> 「抵抗がなかった」とは、あくまでも言語文化の近似性からくる実利面を意味している。当然のことながら、英語使用が再び認可されるようになるまで、マラヤ大学での社会言語学の講義もマレー語でされていた。Dewan Bahasa から原稿を公表し、きちんとしたマレー語を話し、マレー人の同僚や学生に対しても協調的だが、必ずしもマレー文化に好意的ではないらしいことを示唆する小声のオフレコ発言を何度か聞いたことがある。これには、シンド系に限らず、半島在住非マレー人の一般感情を理解する必要がある。ここはムラユの地だ。ムスリムではない者、ムラユ語を使わない奴、すなわち‘pendatang’は、ここから出て行け」と言うマレー人有力者がいるので、予防線を張っておくと同時に、いつ追い出されてもいいように、マレーシア以外にもつてを確保しておくのだという。断るまでもなく、この話はマヤ先生以外の一般人から 1990 年代前半に聞いたものである。

<sup>4</sup> 本文中の(1)「シンディ・コミュニティ」(2)「シンド系」(3)「シンド人」(4)「シンディ」(5)「シンディーズ」の使い分けは、(1) シンド州以外に移住したシンド民族集団 (2) マレーシアのインド系エスニックグループの下位集団 (3) シンド州のシンド民族 (4) (1)から(3)のすべてを含意する英語‘Sindhi’の発音 (5) (4)の複数形‘Sindhis’である。

<sup>5</sup> そのことを教えてくれたクアラルンプール育ちセレンバン在住のタミル系の学校教師(英語・数学担当)は、「あそこはサリーが高いから、私は他のもっと安くていい店に行く」と言っていた(1990年10月頃)。

シンディ・コミュニティの出身地であるシンド州は、パキスタン南部の州都カラチの辺りにある。シンドといえば、すぐ思い浮かぶのがモヘンジョ・ダロだ。パキスタンとインドにまたがる最古の民族の一つで、大変誇り高い人々としても知られる。インダス河のアラビア語発音が「スインドウ河」なので、それにちなんだ民族名だと何かで読んだことがある。元来、同地域にムスリム系シンド人とヒンドゥ系シンド人が共存していたが、パキスタンがムスリム国家として成立した後、前者はパキスタンに、後者の大半は、インドの主要都市であるムンバイ(ボンベイ)、デリー、コルカタ(カルカッタ)、チェンナイ(マドラス)などに移住する。または、英国、香港、シンガポール、フィリピン、インドネシア、マレーシア、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアなど、旧宗主国や近隣アジア地域、コモンウェルス諸国そして移民立国の大都市に散らばっていった<sup>6</sup>。典型的印僑として、表向きは商業活動のために出て行ったのだが、当事者にとってその内情は、いわば「政治的宗教的理由による難民」と形容しうる要素を含んでいなくもないようだ<sup>7</sup>。

「シンド系の人々が、とてもタフで活力に満ち

---

<sup>6</sup> 日本では、横浜と神戸そして沖縄に、貿易商やホテル経営などのシンディ・コミュニティが存在している。今はシンガポールに戻られた叔母さまが、大阪に在住すること長く、日本語が堪能だそうである。マヤ先生が日本人の言語習慣にも少し通じているところがあるのは、その縁からだろうか。

<sup>7</sup> マヤ先生の博士論文には、確か‘religious refugees’という用語が使われていたはずと記憶している。

ている秘訣は何ですか」と単刀直入にお尋ねしたところ、急に声を曇らせて「それは、私達がつらい時代を味わったからよ」とのお返事。英領インドからインドとパキスタンへの分離独立が 1947 年、それに引き続くいわゆる印パ紛争、そして流れた多くの血。先生は、恐らくその前後のお生まれだろうが、二世といっても、マラヤ/マレーシア市民権取得がいつ頃だったのかはわからない。

マヤ先生自身はカトリックであるという。

そういえば、今のカトリック大司教がクアラルンプール司教だった頃、話が指導教官のことに及ぶと、突然険しい表情になり、「なに、シンディ？じゃ、パキスタン人か？ムスリムなのかい？え、カトリックだって？へえ、シンディにカトリックの人がいるのか。それは知らなかった」と舌打ちしていらしたことが記憶に鮮明だ。確かに、私の知る限りでも珍しいケースと言えそうである。博士論文では、シンド系のヒンドゥ教祭典の事例がパンフレット付で紹介されていたが、リサーチの間、先生に関して宗教の違いを問われなかったのかと質問してみたところ、「シンディーズは、そういうことにこだわらないの。何も問題はなかったわ」とのことだった<sup>8</sup>。「フィリピンのシンディ・コミュニティだって、カトリックに改宗してるのよ」。

確かに、国情の関係から、父祖伝来の土地を離れて生きていくことを決心した人々にとって、一刻も早く受け入れ国になじむことが先決であり、いざという時の安全弁としてのコミュニティ結束な

<sup>8</sup> シンド系にもともとカースト制はないとマヤ先生は言い切るが、真偽のほどは不明である。

らば、個人の宗教事情には立ち入らずに、民族出自そのものが優先されるのであろうか。どうもその辺のところは、本当はかなり微妙で、社交上手のマヤ先生としては、適当にうまく振る舞われていたように私には察せられる。もっと言えば、教会に所属してはいても、宗教的なことにはそれほど深入りせずまあほどほどに、という態度のようだった。これも、人生経験に基づく一つの賢明策ないしは処世術なのだろう。

忘れもしないのは、「私はインターナショナルな環境が好きなの。だから、外国からの学生を引き受けるのが楽しみなのよ」という言葉だ。(どういふことなんだろう、この多民族社会のマレーシアで、お愛想なのかな?)などと思ったが、まもなく事情が飲み込めた。シンド系は親族関係が密で、しょっちゅう交流会を開いているとはいえ、千人に満たない程度の人口である<sup>9</sup>。プライバシーなどあってないようなものだ。しかも、他のインド系コミュニティとの連帯感があるのかというと、族外結婚の事例も増えているものの、出身地やカーストや使用言語、宗教、職業などの相違が複雑で、まとまりがあるとはいえそうにない。とあらば、極小集団の一員としては、なるべくマレーシア人以外の人々とつき合う方が気が楽だし、新たな海外事

<sup>9</sup> マヤ先生の説明では、シンド研究の大家だというある外国人が、何百ページもある「ものすごく分厚いインプレッシヴな」本を出したと聞き、早選手に入れたが、マレーシアのシンド系の項には、「幾万人も居住するかのよう書き方」がしてあったという。「でも自分で数えてみたら、たった 600 人以下しかいなかった」とのことである。私の手持ちの資料によれば、約 700 人という数字も見い出せる。

情を入手できるということもあるのかもしれない。それだけに、自分のところに来た人との関わりを非常に重視し、何とか絆を良好に維持しようとする傾向が強く感じられた。とにかく、世間知、経験知に長けるとでもいうのか、あらゆる情報に対してとても敏感で、いろいろなことをよくご存じであり、記憶力も抜群で、頭の回転の実に早い方である。すべて、移民系都市型商人社会で鍛えられた環境的素質なのだろう。そうしなければ生き抜いていけないために、自然と懸命になるのだろう。

いつだったか大学構内で、真新しいベンツを運転した先生が、たまたま通りがかった私に「ちょっと乗っていかない？」と声をかけてくださったことがあった。ちょうど雨が降り出しそうだったが、他の用事もあり、何だか気後れがしてつい遠慮してしまった。まもなく、遠ざかる車の中から「まあ、なんだって断らなくともいいじゃない？」と運転席から甲高く叫ぶ声が聞こえてきた。失礼なことをしてしまったかと申し訳なく思うとともに、何となくおかしな気分になったことを今も思い出す。

ご主人に応援されつつ仕事に励み、二人の息子さんが住んでいるロンドンを年2、3回は訪れ、娘さんにも恵まれ、ベンツも所有するなど、傍目には一見、裕福で社会的にも‘成功’したキャリアウーマンのマヤ先生である。が、つらつら考えてみると、土地を失い、離散の民としてたくましく自立していかなければならない宿命であってみれば、とにかく家族の連携が大切であるのみならず、

何が何でも強気で前進しなければならないというしんどさも抱えていることになる。まず先立つものは、充分なお金と家族の紐帯そして情報、これが肝要だ。個人として実的な適応能力に優れていることは事実だが、裏返せばそれは、長い歴史や伝統に支えられた共同体の安定性を喪失しかけているということでもある。多角的な全方位外交でニコニコと上手に人間関係を築いているように見えて、一面、場当たり対応で根無し草的なところもないわけではない。

マレーシアにおけるシンディ・コミュニティの言語移行に伴い、「シンディ語は危機言語なのか」「シンディ語は滅びゆくことばなのか」という題目で何本も原稿を書き、セミナーで発表もされていたマヤ先生。「そりゃ、誰だってうれしくはないでしょう。世代が下るにつれて、自分達のことばが失われて、ホスト国のマレー語や国際的な英語に移り変わっていくんですもん。でも、それが現実ならば、記述することが自分の仕事だと思ったのよ」。これが私の問いに対する答えである。

シンド系の世代間の言語維持あるいは言語移行については、日本の社会言語学でもブラジル日系人のケーススタディなどでよく似た研究がある。形式的に、両者は比較可能だ。ただ、常々思うのだが、研究には、部外者が知的好奇心から取り組む側面と、当該者による必然なる発露としての両面があり、しかも、若い時の短期決戦で集中して知的訓練をしないとモノにならない部分と、年齢をある程度積み重ねた方が本領を発揮できる場とがあるのではないだろうか。例えば、

母語の維持や移行の研究は、技術的には若い人でもできるし、難解な用語を駆使した男性言語学者の理論説明も悪くはない。けれども、人生半ばにさしかかった、二世あたりの子育て経験のある女性が間に入って、三世代を対象に行う調査は、また一つ説得力が違う。ぐんと重みが増してくる。いつも生産的にテキパキと仕事をこなしていたマヤ先生を思い浮かべるたびに、真に私が学ぶべきは、己の位置づけを生かして、知恵と工夫で道を切り開いた才覚と柔軟さにこそあったのだ、と思う。

モザイクのようなマレーシア社会を万華鏡に見立てると、陰の立役者とでも呼べるような、縁の下の力持ちが見え隠れする。社会の構造や民族の関係性に注目した場合、数の上の少数集団ということから「その他」扱いされたり、または「マイノリティ」あるいは「越境」という指標因子で注目の対象にされたりすることが、往々にしてないわけではない。

人としての素顔に触れると、その限界や皮相さを無言のうちに教えられている気がする。

(後書き) 2003年8月14日にマヤ先生とお会いした。この小文は、その時のおしゃべりにヒントを得たものである。日本での紹介については、快諾をいただいている。

(2003年8月31日記 2004年2月1日加筆修正)

[参考文献]

・Maya Khemlani David, *The Sindhis of*

*Malaysia-A Sociolinguistic Study*, ASEAN Academic Press, London, 2001.

・—————, 'Language shift, cultural maintenance, and ethnic identity: a study of a minority community: the Sindhis of Malaysia', *International Journal of the Sociology of Language 130 - Linguistic Issues of Southeast Asia*, (General Editor: Joshua A. Fishman), Mouton de Gruyter, Berlin · New York, 1998, pp.67-76.

\* 上記の他にも関連論文が多数ある。